



平成 29 年度 国指定 重要文化財公開
首里城京の内跡出土品展

探究し続ける心

沖縄県立埋蔵文化財センター

2018年2月20日【火】▶5月13日【日】

目次

ごあいさつ	1
首里城「京の内」とは	2
発掘調査からみえた京の内	3
コラム 首里城京の内の洞穴について	4
発掘調査の様子 写真	4
中国のやきもの	5
日本のやきもの	6
東南アジアのやきもの	7
いろいろな金属製品	8
コラム 瑞雲日月星文	9
ガラス製品	10
継続される研究とその成果	11
コラム 貝殻の中から金銭が！！ / 保存活用への取組み	13
エピソード【京の内と私】	14
1. 京の内跡の発掘調査 / 2. 京の内の思い出	15
3. 京の内跡出土陶磁器の復元に参加して	16
京の内跡出土品と過ごした日々	17
首里城京の内関連年表	18
重要文化財指定基準／重要文化財指定の名称と指定理由	19
重要文化財首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧	20
引用・参考文献	21

【凡例】

1. 本図録は、国指定重要文化財公開『首里城京の内跡出土品展 ～探求し続ける心～』（開催期間：平成30年2月20日～5月13日）の展示を補完するものとして編集・作成しました。
2. 企画及び原稿執筆は片桐千亜紀・玉城綾・久高健が行い、その他必要に応じて本文に記載させていただきました。
3. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。
4. 調査報告書に記載されている資料名と本図録に記載されている資料名が一部異なるものが存在します。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものです。

ごあいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、国指定重要文化財「しゅりじょうきょう うち沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点 附 一、金属製品、附 一、ガラス玉」を所蔵しております。これらは、平成 6（1994）年度～平成 9（1997）年度に実施された首里城京の内跡発掘調査のうち、平成 6 年度に発見された倉庫跡（1459 年の火災で焼失）から出土したものです。

首里城は、琉球王国の王城として 400 有余年にわたり沖縄の歴史・文化の中心となってきました。そのなかで、京の内は、正殿、南殿、北殿など政治的建物が集中する区画の南西地域に位置しています。「京」は「靈力」と同義であり、京の内は沖縄開闢の二神（女神アマミキヨと男神シネリキヨ）をまつる“首里森御嶽”・“真玉森御嶽”や“京の内之三御嶽”といった重要な御嶽が集中する聖域です。

また、京の内跡からは、海洋国家であった琉球が展開した中継貿易によってもたらされた中国をはじめ、東南アジア諸国及び日本の陶磁器が数多く出土しております。それは、「船舶を諸国と結ぶかけ橋とすることによって異国の宝物類が国中に充満する」という「万国津梁の鐘」（1458 年 铸造）の銘文を彷彿とさせるものです。

今年度で発掘調査が終了して 20 年が経過しますが、膨大な量の出土品については、今なお整理や研究が進められています。その成果として近年脈勝銭、線刻石器、背上月文のある紹興元寶（南宋：1131 年初铸造）などの新発見が相継ぎました。また、保存修理事業も継続しており、毎年新たな修復品ができています。

この度の「首里城京の内跡出土品展」では、重要文化財そのものの魅力だけでなく、発掘調査の状況や最新の資料整理の成果などを合わせてお届けします。この機会に多くの方々に展示をご覧頂き、大交易時代の琉球王国のダイナミックな繁栄ぶりを実感していただけますとともに、埋蔵文化財の調査と研究への理解が一層深まることとなれば幸いです。

平成 30 年 2 月 20 日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 金 城 亀 信

首里城「京の内」とは

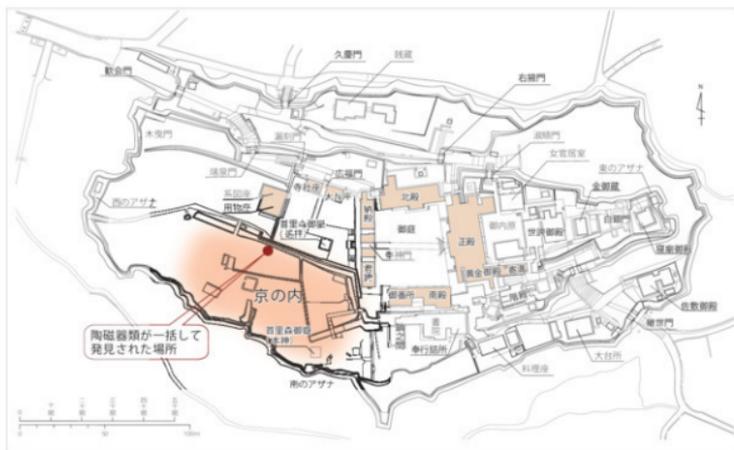
首里城内は、政を司る正殿一帯と、国王のプライベート空間である御内原、聖域空間である京の内に大きく分けることができます。京の内は、首里城内の南西側を占める面積約5,000㎡の区画を指します。

琉球王国の正史、『中山世鑑』に記されている琉球の創世神話によると、天上に住む天帝の指示を受けた創世神アマミクが辺戸の安須森から最良の聖地を求めて南下しつつ、今帰仁カナヒヤブ、知念森、斎場嶽、藪薩の浦原、玉城アマツツ、久高コバウ森と巡り、首里城の首里森グスク、真玉森グスクの御嶽を創設するとともに、琉球の島々をつくります。

京の内は、アマミクが最後に降り立った場所であり、琉球最高の聖域として認めた場所なのです。ここでの「京」は、霊力（セジ・シジ）と同義とされています。歴代の国王は、この最適の地に造った首里城を行政と祭祀の中心としました。

王府の神女・女官関係の文書がまとめられた『女官御双紙』には、首里城内に10箇所の御嶽があるとされています。これらは城内の東西南北、南東、南西、北東、北西のほか、上下に配置されており、ありとあらゆる方向の守りとしたと考えられます。これらの御嶽において、祭祀を司る多くの神女たちは、国王が末永く優れた存在であり続けられるよう祈りました。この様子は、『おもろさうし』の中でうたわれています。

このような背景から、京の内跡から出土した遺物の数々は、城内で執り行われた祭祀に用いられた可能性を示しているのです。



首里城平面図

横内家資料平面図(明治初期)をトレース・加筆

発掘調査からみえた京の内

首里城跡では建物や城壁の復元整備を行う上での基礎資料を得るため、昭和47(1972)年に発掘調査が始められました。そのうち京の内跡の発掘調査は平成6(1994)～9(1997)年度の4カ年行われ、その報告書は平成29年度刊行分を含め7冊にもなります。

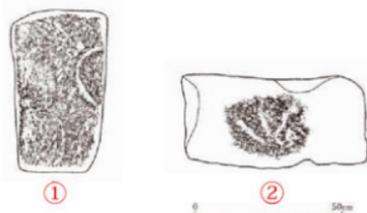
重要文化財に指定されている資料は、1459年に焼失した倉庫跡と考えられる場所から出土した、中国・タイ・ベトナム・日本で生産された大量の陶磁器と金属・ガラス製品です。中でも注目されるのは、中国産の紅釉水注と瑠璃釉水注、さらには元青花八宝文大合子などの貴重資料で、これらは琉球王国の繁栄を物語るものです。

京の内跡の発掘調査では、このような遺物の他に石積みや石敷き・埴敷きなどの遺構が確認されています。その中でも、線刻石器が出土した石敷きは回廊状になっており、その内側に礎石があることから祖霊堂という建物の跡である可能性があります。また、この遺構の石材にはノミで刻印が彫られています。このような刻印のある石は、首里城の久慶門東側や大阪城、江戸城外堀でも使われており石の切り出しや運搬・積み上げなどの際に技術者や労働者が必要性に応じて付けたもののようです。このように発掘調査ではその土地の建物に関する様々なこともわかります。

今回の展示会では、重要文化財に指定されている資料の中の逸品と共に、近年の新発見や調査当時の風景などを紹介していきます。



線刻石器が出土した回廊状の石敷きSS01(右側)と礎石(中央手前)



刻印のある敷石(①)と礎石(②)



回廊状の石敷き(網掛け)と礎石および線刻石器出土地点(●印)の位置図

首里城京の内の洞穴について

平成7年「首里城京の内南側地区」の半洞穴の発掘調査では、背筋が凍るようなできごとがありました。その洞穴は、壁面に漆喰が塗られ、床面は磚瓦敷きで、西側には切石積みみの入口と階段が確認されました。

ある日、洞穴の側で休憩をとっていると、女性の作業員が「金城さん、洞穴の側に着飾った子供と女性が立っていてこちらをみていますよ。」と言ったのです。これを聞いたとたん私は青ざめてしまいました。なぜなら、この洞穴は第一尚氏王統末期の革命の際、尚徳王シムトクの世子・王妃・乳母が避難したが、追っ手に見つかり殺害された場所と言われているからです。

それ以来、私たちは旧暦の一日と十五日は調査現場で線香とお供えをし、無事に発掘調査を終えることができました。(金城 亀信)



真玉森グスク（真玉森御嶽か）

発掘調査の様子



平成6年度の京の内跡の状況（南側から北を望む）



平成7年度の洞穴（真玉森グスク）周辺の調査状況



平成6年度の京の内跡石積みSA01の発掘調査状況（北側より南を望む）



平成7年度の高檣“高ヨザウリ”（高世層理殿）の建物跡の調査状況（南側より望む）

中国のやきもの

首里城京の内跡から出土した中国産陶磁器は膨大な量でした。重要文化財に指定された一括陶磁器群 518 点の内、中国産陶磁器は 427 点となっており、全体の 82.4% を占めています。この数だけでも、琉球王国にとって中国との関係がいかに重要・緊密なものであったかをうかがうことができますが、出土品の内容を見ることによって、さらにその重要性を知ることができます。

圧倒的な存在感で見張らせるものは、やはり大型製品や希少な製品です。青磁では、牡丹唐草文瓶や酒会壺として親しまれている各種大型壺類、大皿類。青花では世界的にも貴重な元代の八宝文大合子や龍文高足杯、明代の花瓶、梅瓶など。青磁と青花だけでも秀逸な製品がそろっており、バリエーションも豊富です。その中でも紅釉水注は世界で 4 例目の発見であり、首里城を除いては中国の故宮博物院で 2 例、景德鎮窯跡出土破片 1 点を数えるのみの、貴重な資料です。

このような大型製品や希少な器種製品は、今帰仁グスクや勝連グスク、久米島の具志川グスク等、他の大型グスクでも見られますが、京の内跡の物量とバリエーションは圧倒的です。京の内跡の発掘調査とその評価によって、「王城」としての首里城の存在感がより浮き彫りになったと考えます。

なお、今年度の展示会では、平成 28 年度に保存修理を終え、完全な姿に復元された瑠璃釉水注を初公開致しますので御注目下さい。



代表的な中国産のやきもの

展示品紹介

復元後 初公開!!



琉球釉水注



紅釉水注



青磁牡丹唐草文花瓶



元青花龍文高足杯



元青花八宝文大合子



明青花牡丹唐草文壺

日本のやきもの

倉庫跡から出土した日本産陶器の多くは、岡山県に窯が集中している備前焼^{びぜん}です。琉球では14世紀末～16世紀初め頃に生産された播鉢^{はりばち}を中心に出土例が増えます。大型の甕や壺はその出土量が少なく、首里城跡や第一尚氏^{ほだいじ}の菩提寺^{ぼだいじ}跡など限られた遺跡で確認されています。

備前焼が琉球にもたらされた背景には、禅僧が寺院で使った事が考えられる他、茶の湯文化に関わる道具として持ち込まれたとする説があります。

出土量は首里城跡やその周辺寺院に集中しており、各地のグスクや集落遺跡ではわずかであることから、王城を中心とした文化的ステータスを示す道具であった可能性も指摘されています。



代表的な日本産のやきもの

いろいろな金属製品

京の内跡からは、武具・武器、装飾具、祭祀用具、建具、生活用具、銭貨などの金属製品が出土しています。これらを、祭祀・儀式関連のものと、建物に関するものに分けて紹介します。

■祭祀・儀式関連

京の内は、最も神聖な儀式や祭祀を行う「神が降臨する場所」であることから、出土した武具・武器は祭祀の際に用いられた可能性があります。そう考える理由の一つが「おもしろさうし」第一巻に謡われている内容にあります。

- 5 「一 聞得大君ぎや 赤の鏡 召しよわりへ 刀うちい 大国 鳴響みよわれ
又 鳴響む精高子が 又 月代は さだけて 又 物知りは さだけて」

この詞からは、儀式で鏡や刀を用いていたことが理解できます。ただし、「聞得大君」は第二尚氏王統（1470～1879年）の最高神女です。倉庫跡が焼失した1459年は第一尚氏王統（1406～1469年）の時期ですので「佐司笠」がその地位にありました。

他に、香炉・鏡・鈴・銚子ちょうしが出土しており、これらも祭祀や儀式に関連する遺物と考えられます。



左：鏡 上段右：長柄付片口銚子の容器
下段中：鼎形香炉把手 下段右：香炉胴部



上段：兜鉢及び前立 下段：小札、鎖帷子ほか

ずいろうんにちげつほしもん
瑞雲日月星文

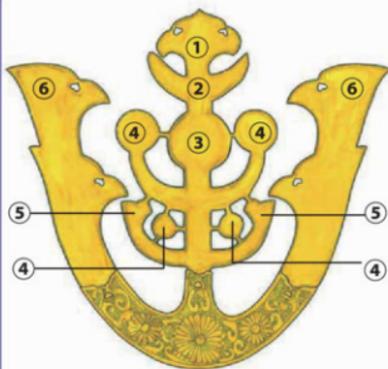


京の内跡から出土した金属製品の中で、特に注目されたのが琉球王国で製作された兜鉢立物飾りです。出土した29点の破片を基に、図上復元することができました。

この立物の形状は、部位によりそれぞれ意味を持つことが考えられます。これを解きほぐすため、復元図に便宜上の番号を付し、解釈を行います。



兜鉢の立物



- ①「雲」：瑞雲。
- ②「月」：「月しろ」は、月の異名で神名。月神。女神。
- ③「日(日輪)」：日神(太陽)。按司・国王。テダ思想。
- ④「星」：星信仰、及び子孫繁栄。
- ⑤「植物」：稲・麦などの農作物豊穰祈願。
- ⑥「獣形」：鹿の角。中国で鹿は、長寿の仙獣。

【推定復元の兜鉢立物飾りの解釈】

これらの意匠構成から、出土したこの立物飾りは「瑞雲日月星文」と名付けました。この意匠は、本土での類例が確認されていないことや、首里城西のアザナ地区の発掘調査で京の内出土品と同一サイズで鍍金のある立物飾り金具破片が出土している状況などから、城内で独自に製作されたものと推定されます。本土から輸入された鍹や兜の中には琉球独自の意匠を追加して儀式などで使用したり、あるいは中国へ琉球王国の製品として輸出したものがあつたことが考えられます。(金城電信)

■建物関連

建物に関するものとして、釘や錠^{かすがい}があります。釘は「和釘」と呼ばれる断面が方形のもので、頭部分がくしゃんと曲がっています。現在よくみる平面が円形の「洋釘」は、明治時代になってから使われるようになりました。錠は木材どうしをしっかりとつなぎ留めるコの字形の金具です。また、錠前のパーツや鍵も出土していることから、京の内に存在した倉庫に使用されたことが想定できます。



上段：鉄釘、かすがい 下段：錠前・鍵

ガラス製品

■袋に入れて大切に…

ビーズは神女が儀式の際に身につけた装飾品や供えもの一つとして欠かすことの出来ないものでした。京の内からはたくさんのガラスのビーズが火災により互いにくっつき塊となって出土しました。このビーズを顕微鏡で観察したところ、布袋の繊維痕（布目痕）が確認されました。このことからビーズが布袋に入ったまま熱で溶けることにより、布目の凹凸が写し取られたと考えられます。これらの点から、袋に入れて大切に保管していたことが想定できます。



被熱の痕跡がみられるビーズ（ガラス製品）と金属製品



ガラスの表面に布の繊維痕が確認できる

継続される研究とその成果

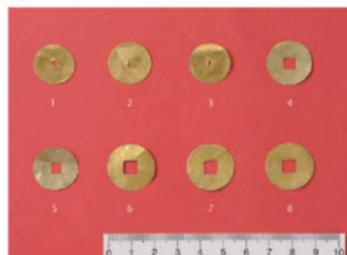
首里城京の内跡からは、重要文化財に指定された土壇 SK01（倉庫跡）の一括資料だけでなく、膨大かつ多種多様な資料が出土しています。その資料整理・研究は現在も進行中であり、これまでに報告書は、重要文化財に指定された資料が報告されている（Ⅰ）から始まって（Ⅵ）までの6冊が刊行されており、平成29年度には（Ⅶ）の刊行も予定されています。

整理と研究は、発掘担当者の粘り強い意思によって継続されており、現在も多くの新発見につながっています。

例えば、京の内御嶽跡から出土した、チョウセンサザエの中には、8枚もの金銭が納められていたことが判りました。当時の琉球王国が御嶽を創建する際に、土地の神への地鎮の祈りを込めて埋納したものと考えられています。



金製厭勝銭が発見された
チョウセンサザエ製埋納容器



発見された金製厭勝銭
1～3：釘孔銭、4～8：方形孔銭

その他、銭貨類では「紹興元寶」（南宋：1131年初鑄造）があります。裏面に「背上月」と称される三日月模様があるものは類例が少なく、希少性が極めて高い資料です。さらに、石敷き SS03 からは「皇宋通寶」（北宋：1038年初鑄造）の銭型が発見されており、首里城内で模鑄銭が造られていたことを示唆する貴重な資料と考えられています。



紹興元寶



皇宋通寶の模鑄銭銭型

また、石敷き SS01 からは県内で初となる線刻石器が発見されており、帆船や小舟、人物、波、魚などが象徴的に描かれています。

さらに、京の内跡からは首里城が王城となる以前の 14 世紀前半から中頃のものと考えられる遺構（土壙 SK03 及び野面積みの石積み）や遺物が発見されており、グスクとしての歴史を考える上で大変重要な成果も得られています。

このように、京の内跡からは秀逸な陶磁器等が出土した土壙 SK01（倉庫跡）だけでなく、聖域性を示唆する遺物や、王城以前の遺構や遺物が確認されており、その全容は未だ明らかになっていません。今後も調査研究を継続することによって、さらなる事実を明らかにしていきたいと考えます。



線刻石器

コラム

貝殻の中から金銭が！！

平成 8（1996）年度に実施した首里城跡京の内西側地区の発掘調査で、御嶽跡が 3 か所発見されました。その内の 1 か所の御嶽跡の基礎石直下から中国銭貨「嘉祐元寶（北宋：1056 年初鑄造）」1 枚、「元祐通寶（北宋：1086 年小平銭・1093 年折二銭初鑄造）」2 枚、「洪武通寶（明：1368 年初鑄造）」1 枚、「永楽通寶（明：1408 年初鑄造）」2 枚と琉球王国の銭貨「世高通寶（1461 年初鑄造）」1 枚の合計 7 枚が見つかりました。

これに加えて、写真のように 2 つのチョウセンサザエが組み合った状態で発見されました。発見直後、蓋の役目をしている小さい方のサザエをねじ開けて大きいサザエ殻の中を竹串で確認しましたが、何も見つかりませんでした。そのため、サザエの殻蓋を元の通りに戻し、洗浄までを現場事務所で行い、御嶽跡から出土した銭貨と一緒に重要遺物として保管していました。それから 18 年後（平成 26 年）、注記作業の最中にこのサザエを手にした職員から「金城班長、誰かがいたずらして貝殻に金紙を入れていますよ！」と笑いながら声をかけられました。確かめてみると、なんと本物の金銭（厭勝銭）でした。金銭は最終的に 8 枚出てきました。金銭は薄く延ばした金の板にコンパスのようなもので円を描いてから工具で切り抜いて製作されていました。切り抜かれた金銭のうち 3 枚は中央に釘で穴を穿っており、5 枚は正方形に切り取って穴を開けたものです。



王府は京の内に御嶽を創建する際、地鎮（中国や日本本土から伝わった儀礼）のため土地の神様に吉祥物として金銭を埋納したものと考えられます。発掘調査から 18 年越しの大発見となりました。（金城亀信）

保存活用への取組み

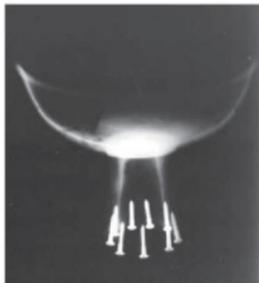
京の内跡出土品の中でも、重要文化財に指定された陶磁器類のうち、器形復元ができるものについては、過去の資料整理の段階で石膏による復元を行っています。

その工程は、破片のない箇所に石膏を補填し、工具類で削って整形します。

しかし、石膏は乾燥するととても硬く、力を入れすぎると外れることもあり、実物と同じ形状に削り出すには熟練の技が必要です。また、実物部分と石膏部分の重さのバランスを図るために右のX線写真のように金属を埋め込んだ資料もあり、これらの復元資料には資料整理作業に携わった方々の知恵や工夫、技術が詰まっています。

しかしながら石膏は耐用年数が短く、復元から10数年以上が経った現在、劣化が進む資料もあります。そこで当センターでは、文化庁の補助を受けて、平成16年度より重要文化財に指定された「首里城京の内跡出土陶磁器」518点及び金属製品やガラス玉について、資料の劣化を防ぎ、適切な保存及び活用を行う目的で保存修理事業を実施しています。陶磁器については、石膏部分を耐久性のある樹脂へ置き換え、金属製品については、防錆処理や補強のための樹脂充填を実施しています。

本事業は現在も継続中で、これまでに148点の陶磁器及び金属製品の保存修理が完了しており、今後も適切な保存及び活用を図るために保存修理を続けていく予定です。全ての修理を終えるには長い年月がかかりますが、これらの修理が完了し、改めて集合写真を撮る日が来ることを楽しみにしています。(金城貴子)



元青花龍文高足杯保存修理前のX線写真



京の内跡出土品の集合写真(平成12年撮影)

京の内跡の発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 金城亀信

平成6（1994）年から平成8（1996）年度までの三カ年間、今帰仁城跡志慶貞門郭地区、南城市玉城系数城跡、首里城京の内地区の三つの国指定史跡の発掘調査と整備指導を掛け持ちで担当していました。

その内、首里城京の内地区（面積約 5,000 m²）の復元整備に伴う発掘調査では、平成6年度に約 2,000 m²を、平成7・8年度に各々 1,000 m²の計 4,000 m²の発掘調査を実施しました。今回は3カ年間の調査で特に重要な発見があった平成6年度の調査について記載します。

平成6年度の調査で、下之御庭地区に接する調査区北側の3mの範囲内で二次的な火熱を受けた陶磁器類の破片が一括で廃棄された土壌 SK01 がみつかりました。多量の陶磁器と共に金属製品（兜鉢、鍬形台、銭貨など）も多く見つかったため、毎日発掘終了後は県教育庁文化課の若狭資料室に戻って金属製品を浸すために純度 99.5%の工業用アルコールでの保存をおこなっていました。ところが、アルコールを使い切ってしまったため最終的に 30 度の泡盛 10 本を自費で購入して乾燥海苔の大瓶に詰めて保存をしました。



土壌 SK01 内の調査では、最終的に多量の焦げた陶磁器類から成る堆積層（層厚 50～70cm）が土砂を含まない状態であることを確認しました。南側の入口から北に向かって下りる階段も3段確認し、ここが火災で焼失した倉庫跡であることが判りました。発見した直後は、日本国内の貿易陶磁器研究に於いて空白の 15 世紀前半から中頃の時期を埋めることのできる大きな成果となる、と身震いをしました。首里城内の火災で焼失した倉庫跡に関する文献史料を検索したところ、候補として2件の記録が該当しました。最初の1件は 1453 年（尚金福 4 年）に起きた王位継承をめぐる争乱であった「志魯・布皇の乱」で首里城正殿を含む火災による倉庫などの消失です。2件目は『明實録』の英宗實録、巻 301 の 1459 年 4 月 5 日の項に「天順三年三月癸未朔（甲申）禮部奏、琉球國中山王尚泰久奏稱本國王府失火、延燒倉庫銅錢貨物。〈以下、省略〉。」の記載です。互いに時期に近い2つの出来事ですが、火災のあとが狭い範囲に限定されている事などから後者の 1459 年の火災で焼失した倉庫跡と判断をしました。3カ年間の調査期間中に亀井明德専修大学教授をはじめ、ノルウェー科学アカデミーのトゥール・ハイエルダール博士などの多くの研究者が現場を訪れたことも印象に残っています。

私が、京の内の調査に関わったのは、大学最後の春休みから卒業（平成7年2月後半～3月）までの短期間でした。調査担当は、金城亀信さん。

現場に入ります戸惑ったのは、調査をしている私たち自体が展示物となっていること。首里城正殿に向かってすぐ右手の敷地で調査していたため、観光客からは頻りに声がかかり、そのたびに作業を中断するのは、初めての経験でした。また、層序の実測をしていた時、私には、どうしても亀信さんが引いた遺物包含層の境目が分からないことがありました。「私には同じ色にしか見えません」と素直に白状すると、「ま



ずは、見えるままに線を引いてみて、観察をしながら線を足す！」と、色だけでなく、質感、遺物の傾き方、含まれる砂粒の大きさ等を丁寧に教えてくれました。この遺跡では、1つのグリッドにおける遺物の出土量にも驚きがありました。出土遺物を管理するため、チャック付のビニール袋や土嚢袋には、遺跡名・出土年月日・グリッド名・層等を記載するのですが、書いても書いても、遺物はザックザック出てきて、休む暇も与えられません。油性ペンを持つ手が握りそうになる、という経験もしました。

そして、京の内の調査で何よりもインパクトが大きかったのは、「鉄・青銅製品泡盛漬け」事件です。当時、出土した遺物は、那覇市若狹にあった資料室で整理されていました。京の内では、貴重な中国陶磁のみならず、漆製品、鉄・青銅製品も複数出土していましたが、この鉄製品等の管理には、アルコール保存が必要でした。当時は、今よりも化学薬品等を販売している業者も少なく、工業用アルコールは、注文すると納品に1ヵ月以上かかるとのこと。そこで、亀信さんの「度数が高くて安い泡盛を買ってきて」という指令が！宮古島産のとある泡盛で鉄製品等を漬け、資料室の作業員が匂いで酔っ払うという事件は、こうして起こりました。

それから数年の後、京の内出土の遺物が、国の指定文化財になりました。亀信さんに「おめでとうございます」とお電話すると、「胃が痛かった」と切々と訴えられました。当時は飄々として見えたのが、今思えば、これだけの遺跡です。いかほどの苦勞を抱えていたのだらうと尊敬します。

そして今、きれいに整理された状態で、これらの遺物を見ることが出来ます。美しく展示された資料の背景に、調査担当者の苦勞が隠れていたことも、感じていただければと思います。

私をはじめて首里城京の内跡に関わったのは、平成6（1994）年度の発掘調査でした。発掘はすでに終了しており、私は嘱託員として遺構図作成のため、当時の調査担当者である金城主任（金城所長）の指示により、ひたすら実測したことをおぼえています。

その後、私は平成8（1996）年に入庁し、教育庁文化課（現文化財課）に配属されました。その当時、京の内跡から出土した膨大な遺物は整理中で、今はなき若狭資料室の作業台には、接合・復元中の陶磁器がびっしりと広げられていました。

これらの出土品を重要文化財に指定するにあたり、文化庁美術学芸課から、陶磁器の石膏復元部分にも絵付けを行うよう指示がありました。沖縄県ではこれまで、陶磁器の復元に関し精密な絵付けの経験がなかったため、京都から文化財修復の絵付けを得意とする方をお呼びし、指導いただきながらアクリル絵の具による絵付け作業が行われました。

幸運にも私は、このうち3点の絵付けに関わることができました。これらの資料はその後、石膏部分を樹脂におきかえる再修理が行われましたが、絵付けは当初のまま修理が行われていることから、この資料をみるたびに当時のことを思い出します。



絵付け復元作業の様子



絵付け復元に関わった資料（中国産色絵碗1点・青花瓶蓋2点）

京の内跡出土品と過ごした日々

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 金城竜信

平成6年度から平成8年度の京の内地区の発掘調査を終了した後、平成6年度に発掘された出土品の資料整理を平成9（1997）年度から若狭資料室と首里資料室で発掘調査報告書作成のため行いました。若狭資料室では、倉庫跡から出土した陶磁器類の石膏による復元作業の中で、難易度の高い元青花龍文高足杯、元末明初の紅釉水注、明青花梅竹樹文双耳大瓶の復元を行いました。

報告書作成の際は陶磁器類の分類と実測図及び出土品を確認しながら原稿執筆と陶磁器類の接合を実施し、自ら90点余を接合しました。資料整理の期間中に元東京国立博物館の長谷部楽爾次長、出光美術館の弓場紀知学芸課長、文化庁記念物課坂井秀弥文化財調査官（現：奈良大学教授）などの多くの陶磁器研究者に指導や助言を請うため若狭資料室へ来室を依頼しました。その中で坂井秀弥文化財調査官より国指定の文化財として指定したいので倉庫跡から出土した陶磁器の個体数を求めるようにとの依頼もありました。

最終的に倉庫跡から出土の陶磁器は1,162個体である事を平成10（1998）年3月刊行の発掘調査報告書に掲載することが出来ました。同年10月17日～19日の三日間、日本考古学協会沖縄大会が沖縄国際大学で開催され、最終日に設定された見学会では、若狭資料室の屋外でコンテナ50～60箱を広げて、首里城京の内出土資料を観覧してもらいました。参加者45名が観覧している様子は骨董市のような賑やかさで、陶磁器研究者が終始出土品の観察や写真撮影を行っていました。刊行された報告書掲載の陶磁器518点（その内、石膏復元の点数は294個体）は、平成12年6月27日付けで沖縄県に於いて初めて考古資料の部で国の重要文化財指定を受けました。

平成6年度の発掘調査で検出された遺構と出土品の報告は、平成30年3月刊行予定の報告書を含め7冊となりますが、次年度以降は平成6年度調査の遺物編（4）並びに平成7年度と平成8年度の発掘調査報告書の刊行を計画しています。

特に遺構や層序は発掘調査の担当者がしか解釈ができません。発掘調査担当者としての責務を果たすため、定年退職後も引き続き発掘調査報告書の刊行のため、再任用を希望し頑張りたいと思います。

重要文化財指定基準

◎ 考古資料の部

重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鐸、銅剣、銅鉞その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官舎、寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○ 国宝及び重要文化財指定基準、(中略)・基準(抄)(昭和26年5月10日文化財保護委員会告示第2号)【最終改正】平成8年10月26日文部省告示第185号より一部抜粋。

重要文化財指定の名称と指定理由

(考古資料の部)

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所 有 者：沖縄県(沖縄県立埋蔵文化財センター保管)

(庁保美第3の3号平成12年6月27日付け「重要文化財の指定について」
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成)

説 明 文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当歳に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は霊力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽(しゅりのもくたけ)は琉球王国の最高神女である聞得大君(きくとくおほきみ)が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成6～7年度に実施され、約2000平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順3年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね14世紀中頃から15世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に2点と景德鎮窯跡出土の破片1点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が国中に充滿する」(訳文の趣旨)とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鐙等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

(文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成12年6月号より抜粋)

※ 官報告示：平成12年6月27日付け文部省告示第120号

※ 文化財保護法(昭和25年法律第214号)第27条第1項の規定により、平成12年6月27日付けで重要文化財に指定。

重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

重要文化財 考古資料の部		
指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器	518 点	
附 一、金属製品	一括	
附 一、ガラス玉	一括	

重要文化財 陶磁器内訳

種 類	器種：点数	器種：点数	器種：点数
青 磁 (289 点)	碗 103	皿 117	盤 32
	壺 20	大花瓶 2	馬上杯 1
	水注 3	瓶 5	香炉 3
	水滴 1	花盆台 1	大鉢 1
白 磁 (33 点)	碗 14	皿 11	杯 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付 (2 点)	馬上杯 1	大合子 1	
明染付 (58 点)	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色 絵 (3 点)	碗 2	皿 1	
紅 釉 (1 点)	水注 1		
瑠璃釉 (2 点)	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器 (1 点)	碗 1		
褐釉陶器 (35 点)	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋 1	特殊壺 1	
	壺蓋 1		
白釉陶器 (3 点)	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器 (55 点)	壺 55		
タイ産半練土器 (22 点)	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器 (3 点)	瓶 1	水注 2	
備前ほか (本土産) (6 点)	播鉢 1	かめ糞 3	壺 2
瓦質土器 (沖縄産) (5 点)	蓋 5		
合 計		518 点	

《引用・参考文献》

- 池田榮史 2006「沖縄出土の備前焼」『備前市歴史民俗資料館紀要』8（備前歴史フォーラム資料集）
- 池田榮史 2007「沖縄出土の備前焼・補遺」『南島考古』第26号 沖縄考古学会
- 上地克哉・上原静 1993「首里城城郭検出の「刻印石」」『文化課紀要第9号』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1998『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）—』沖縄県文化財調査報告書 第132集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第56集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第62集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2014『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅴ）—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第73集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅵ）—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第89集
- 金武正紀 2004「沖縄から出土したタイ・ベトナム陶磁」『シンボジウム陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器—』東南アジア考古学会
- 向井互 2009「タイの陶磁史（二）—ブリラム陶磁器—」『陶説 七月号』第六七六号 日本陶磁協会

沖縄県立埋蔵文化財センター
平成29年度重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

～探求し続ける心～

発行日：平成30（2018）年2月20日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

HP <http://www/pref.okinawa.jp/edu>

関連文化講座

「京の内跡出土品と過ごした日々」



講師：金城 亀信（沖縄県立埋蔵文化財センター所長）

平成 30 年

3/31 [土]

13:00 - 14:00

京の内跡発掘調査当時の状況や、これまでの資料整理・研究の全てを語ります。

※予約不要、先着 140 名

※講座終了後、講師による展示解説を行います。

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751

入所無料

【開所時間】午前 9 時～午後 5 時（入所は午後 4 時 30 分まで）

【休所日】毎週月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日を除く）

年末年始、慰霊の日（6 月 23 日）

※月曜日が祝日となった時は、翌日の火曜日も休所